



(十日町)

調査地は、旧余川川によって形成された、両側を魚沼丘陵と接する扇状地南端の肩部にあたる。丘陵端部と扇状地との比高差は一〇m以上に及ぶ。調査は国道一七号線バイパス工事に伴う試掘調査である。

周辺の遺跡は丘陵上を中心には五世紀後半の飯綱山古墳群が所在し、これに関連すると思われる集落遺跡が扇

- 1 所在地 新潟県南魚沼郡六日町大字余川
- 2 調査期間 二〇〇一年(平13)七月
- 3 発掘機関 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 4 調査担当者 澤田 敦
- 5 遺跡の種類 遺物散布地
- 6 遺跡の年代 古代・中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は、旧余川川によって形成された、両側を魚沼丘陵と接する扇状地南端の肩部にあたる。丘陵端部と扇状地との比高差は一

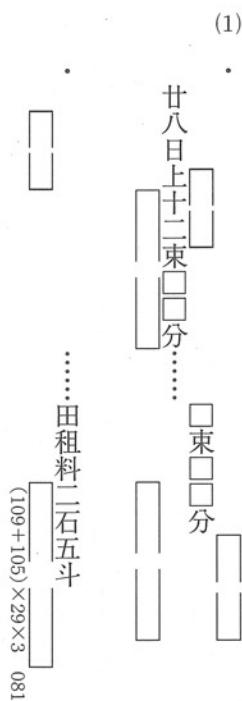
〇m以上に及ぶ。調査は国道一七号線バイパス工事に伴う試掘調査である。

周辺の遺跡は丘陵上を中心には五世紀後半の飯綱山古墳群が所在し、これに関連すると思われる集落遺跡が扇

央付近で発見された(余川中道遺跡)。約一km南の丘陵先端の崖部には「弓公」「厨」「醜」「野家」などの墨書き器約四〇点が出土した長表遺跡がある。平安時代以降、六日町を中心には「上田荘」が形成され、中世後期にはここを拠点とする上田衆が上杉家の勢力基盤の一端を担う。直江兼続の坂戸城も魚野川の対岸に位置する。

木簡は粘土に草などの植物遺体が混じる水辺に近い様相を呈する土層から出土した。出土状況は上部片が墨痕のある面を上にして横たわる状況で出土し、下部片は垂直に立った状態で出土した。木簡出土にともない周囲を拡張調査したが、他に木簡は発見されなかつた。他の共伴遺物も、漆器片を出土しただけで土器類はなく、考古学的に時期や遺跡の性格を示すものは見られなかつた。

8 木簡の釈文・内容



二断片は約一m離れて出土し、年輪の一致から同一簡と判断した。

直接接続する可能性もある（平川南氏のご教示による）。

木簡の表裏は不確定。上部片上端部は自然に摩耗したようになめらかで、人為的に折られたかは不明。下部片上端部にも明確な刀物跡は認められない。下部片下端部には二ヶ所に刀物痕跡が残り、人為的に折られた可能性が高い。上部片裏面の調整は不明だが、それ以外の面には調整が加えられる。「□□分」は、人名を示す「諸繼分」もしくは、「諸座分」とも考えられるが、決しがたい。下部片両側にほぼ1cmの等間隔の、直徑約3mm程度の半円形の切り込みを有する。切り込みが文字を切つており、両断片が分離する以前に二次利用され、その際に切り込まれたとみられる。兵庫県袴狭遺跡などでは木簡が斎串や人形に転用された例があり、こうした類例から本木簡も斎串に転用された可能性が考えられる。

木簡の時期は不詳。「田租料」という内容と、「束」の字体が金沢市上荒屋遺跡四三号木簡などに類似することから、古代の可能性が考えられる。一方、「田租」は九世紀後半以降の荘園関係文書で「田租正税」など荘園税制に関係して用いられ、稻の記載などからは帳簿的な性格がうかがわれる。荘園関係の帳簿とみることもでき、その場合は『兵範記』保元二年九月二十九日条（初見）で「魚野郡殖田村」と記される上田荘との関連性が注目される。木簡の作文や性格などに関するも未解決の問題点も多く、今後の課題としたい。

なお、木簡の釈文については国立歴史民俗博物館平川南氏・東京大学史料編纂所山田邦明氏・東京大学大学院新井重行氏らのご教示を得た。

## 9 関係文献

（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成二三年度』（2001年）

（田中一穂）



（赤外線デジタル写真）